

## 『江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽』の課題と検証

前島 美保(東京藝術大学)

本書は、2012年東京藝術大学に提出した博士論文「十八世紀上方歌舞伎音楽の研究—囃子方を中心に—」に改題と改訂を施し、資料篇を新たに加えて2020年に刊行したものである。座付きの歌舞伎囃子方に関する歴史研究は、主に江戸を対象にこれまで進められてきた。近年、上方(京・大坂)に蓄積が見られるものの、江戸中期すなわち十八世紀については未だ通史がない。本書はこの点に着目し、江戸中期上方歌舞伎囃子方の変遷とその音楽について、番付等の一次史料に基づき解明したものである。

十八世紀上方の囃子方は、宝暦期(1751～64)前後でその性格が変わると考えられる。宝暦期前には417名の囃子方がおり、岸野次郎三郎、山本喜市らの上方出身の名うての囃子方が、初代坂田藤十郎や初代芳沢あやめといった当代随一の役者と同座して上方歌舞伎を支えていた。唄方は小歌と呼称されており、中には屋号で芝居に出勤している者や能の囃子方を兼ねる者、囃子方として修業したのちに歌舞伎役者となる者など、専門的・職業的囃子方としての途上段階や、中世と地続きの文化環境を見て取ることができる。一方、宝暦期以降になると446名の囃子方が確認されるが、次第に湖西市十郎や鈴木萬里など江戸出身の囃子方が牽引するようになっており、長唄呼称が定着するなど上方における江戸化が進んだ。

こうした囃子方の変遷は、少なからず音楽面にも変化を与えた。例えば一日の最初に上演されていた脇狂言や、盆興行にて一日の最後一座総出で行われた都風流大踊など、もともと独自の踊りの習慣が上方にはあった。ところが宝暦期以降になると、脇狂言も都風流大踊も上演機会が減少し、その内容に変化を来した。代わって上演されるようになったのが「娘道成寺」などの江戸歌舞伎において大成、流行した所作事で、その上演に際しては江戸の囃子方の存在が大きかった。

以上を換言すれば、十八世紀の文化東漸とその還流という文化動態現象を上方歌舞伎囃子方と音楽の側面から見定めた一書ということが出来るが、本発表ではいくつかのトピックスに焦点を絞り、内容の紹介および課題と検証を行いたい。